



Data

監督・製作: クリント・イーストウッド

出演: ポール・ウォルター・ハウザー / サム・ロックウェル / キヤシー・ベイツ / ジョン・ハム / オリビア・ワイルド / ニナ・アリアンダ / イアン・ゴメス

👁️👁️ みどころ

1996年7月27日、アトランタ五輪で爆発事件が勃発！たまたま、不審なバックパックを発見した警備員リチャード・ジュエルのおかげで最悪の事態は免れたから、彼は一躍ヒーローに！ところが、第一発見者は第一容疑者？そう言えば、このオタク男には怪しげな点がいっぱい！

近時のマスコミも酷いが、本作の女記者は最悪！また、FBI捜査官のレベルも最低！2020年の東京五輪は大丈夫？テロの危険の他、新型コロナウイルス感染の危険も広がっているが、その対策は・・・？

本件でワトソン弁護士が実際にどれだけ役に立ったのかはよくわからない。また、母親の「涙の会見」をどう見ればいいのか？そんなこんな不満もあるが、クリント・イーストウッド監督14本目の「実話モノ」をしっかり味わい、今後の教訓としたい。

— * — * — * — * — * — * — * — * — * — * — *

■□■ 90歳にして40本目の監督作品！実話モノは14本！ ■□■

俳優クリント・イーストウッドは『荒野の用心棒』(64年)に代表される、いわゆる「マカロニ・ウェスタン」で有名だが、それ以外の俳優としての出演作も多い。高校、大学時代の私はそれをよく知っているが、1971年に『恐怖のメロディ』で監督デビューした後は、監督と主演を兼ねた作品をハイペースで作り続け、今では「巨匠」という呼び名もピッタリ。近時は監督と製作を兼ねた作品も増えている。私は2020年1月26日に71歳の誕生日を迎えたが、2020年の今年が満90歳になるクリント・イーストウッド監督は、監督作品40作目となる本作に製作を兼ねて挑戦！

本作のパンフレットには、南波克行氏による「“実話に基づく” イーストウッド監督作フィルムグラフィック」がある。これは、「史実、事件、人物を通し、アメリカの光と闇を同時に映し出すイーストウッドの“実話に基づく” 作品群。強烈なリアリティの追求と社会性と時代性、それらをエンターテインメントに昇華する手腕。そして、彼が手掛けた作品は、“いま”を知ることでもある。」という視点から、彼の過去13本の実話モノを分析している。また、同氏の「イーストウッドと実話」と題したコラムでは、本作を含めて、14本の実話モノのうち12本が、イーストウッド監督の代表作とっていい『許されざる者』(92年)以降であることを踏まえておきたい、と強調しているが、それはなぜ?それは、同コラムをしっかり読み、本作との異同点をしっかり分析すればわかることだから、1人1人の観客にその作業をやってもらいたい。

それはそれとして、今年90歳になる巨匠クリント・イーストウッド監督の40本目、実話ベース作品14本目という本作のタイトルになっている『リチャード・ジュエル』とは一体何者?そして、彼についての実話ベースの物語とは一体ナニ?

■□■ 1996年のアトランタ五輪で、爆発事件が勃発! ■□■

2020年7月24日にはついに東京オリンピックが開催されるが、このような大規模イベントで常に心配されるのはテロの危険。2001年の9.11同時多発テロの凄まじさは今でも記憶に新しいが、2020年の東京オリンピックは大丈夫?日本は平和で治安のよい国だが、それでも今のご時世を考えれば、心配は尽きない。

1996年にアメリカのアトランタで開催された第26回オリンピックでは、7月27日午前1時25分、バックパックの中の釘を仕込んだパイプ爆弾が爆発した。当日は、オリンピックのメイン会場近くの記念公園は、パーティーやロックコンサートを楽しむ観客たちで溢れていたが、警備員リチャード・ジュエル(ポール・ウォルター・ハウザー)が公園のベンチの下に不審なバックパックを発見し、直ちに警察に通報した結果、警察は避難誘導を開始。その後、ある男性から公衆電話で警察に、「記念公園に爆弾を置いた。あと30分で爆発する」と犯行予告電話があったため、観客が避難している最中、通報から数分後の午前1時25分、爆発。これによって、死者2名、負傷者111名の惨事となったが、多くの観客は避難していたため、それ以上の大惨事は避けることができた。

しかして、ベンチの下の不審なバックパックの第一発見者になったうえ、マニュアル通り適切な処理を行ったジュエルは一躍ヒーローになり、マスコミの取材が押し寄せることに。それに対して彼は、「僕はヒーローじゃない。僕はマニュアル通りやっただけだ」と優等生的発言を繰り返していたが、内心は誇らしげ。それまでも、ずっと法執行官になりたいとの夢を持ち、それに向けた努力を続けていながら、なかなかそれが実現できないもどかしさを感じていたジュエルも、そんな彼と2人で同居している母親のボビ(キャシー・ベイツ)も、今回の結果には大満足。2人ともいかに嬉しそうだ。

そんなある日、ジュエルは出版社から自叙伝の出版を持ちかけられることに。もちろんジュエルは乗り気だが、あまり調子に乗りすぎるとヤバイ……。さて、彼はどうするの？

■□■犯人は誰だ！テロ犯が本命？その他の犯人像は？■□■

本作はクリント・イーストウッド監督14作目の「実話モノ」だが、テロ犯を主人公にした実話モノではなく、ジュエルを主人公にした実話モノ。そのため、クリント・イーストウッド監督は本作導入部で、本来は法執行官になりたいとの夢を追う真面目な青年でありながら、太っちょでオタクっぽい性格、そして結婚もせず母親と2人だけの同居生活という体たらくぶりのため、世間からは“ちょっとヘンな奴”と思われているジュエルの姿を浮き彫りにしていく。

クリント・イーストウッド作品は手際良さが1つのポイントだが、そんな導入部を見ると、彼が規則やルールを重視するあまり融通が利かないため、副保安官や警備員時代に何かと周囲に軋轢を生む姿が手際よく描かれていく。いるいる、こんな男。近時は「KY（空気が読めない）」という言葉遣いが減っているが、彼のような、周りの空気が読めない若者が最近増殖しているのは間違いない。すると、1997年当時のアメリカにもそんなKYな若者がたくさんいたの……？

ちなみに、爆発事件が起きた当日、ジュエルの体調は最悪で、下痢に苦しんでいたらしい。休まず勤務したのは持ち前の勤勉さによるものだが、それでも勤務中は何度もトイレに駆け込んでいたから、ホントに仕事に役立ったのかどうかは疑問。そんな彼が偶然目にしたのが、ベンチの下に忘れられたように置いてあった黒いバックパック。そんな不審物を発見した場合、会場警備員としてはどう動けばいいの？これは、一方では高価品が入った誰かの忘れ物かもしれないし、他方ではテロ犯が爆発物を詰め込んだものかもしれない。そう考えたジュエルが、マニュアル通りバックパックには自分で触らず、順次連絡していったのはある意味で立派だが、ある意味で連絡された担当者たちはうっとうしい限り。そんなもの、自分で中身を見て、捨てるなら捨てる、遺失物として届け出るなら届け出ればいいのでは……？いやいや、それではダメ。もしホントにこのバックパックの中に爆発物が詰め込まれていたら……？

■□■ワトソンはどんな弁護士？VS リンカーン弁護士？■□■

『リンカーン弁護士』（11年）（『シネマ29』178頁）で見たミック・ハラー弁護士は、ガソリンを大量に食いながら走るアメ車の代表リンカーン・コンチネンタルの後部座席を事務所代わりに使いながら東奔西走の弁護活動を展開している、刑事事件専門のやり手弁護士だった。『評決のとき』（96年）で若き正義派弁護士を演じたマシュー・マコノヒーが、15年後にはそんな一見悪徳弁護士役を演じたのは意外だったが、その変わり身の見事さとともに、同作の法廷モノとしての面白さは一流だった。それに対して、本作でジュエル

と並ぶ準主役として登場する、ワトソン・ブライアント弁護士（サム・ロックウェル）のキャラクターは？

彼は、もともと中小企業局アトランタ事務所に勤務していた男だが、いつどのような試験を経て弁護士になったのかは、本作ではサッパリわからない。クリント・イーストウッド監督が本作導入部で描くのは、中小企業局アトランタ事務所に勤務していたワトソンが、備品担当として勤務していたジュエルに「レーダー」というあだ名をつけるに至ったエピソードだ。机の引き出しを勝手に開けることは備品担当者としては越権行為にあたるはず。しかし、それによって、ワトソンのおやつの好みを知ったり、不足している備品を補充したりできるのは、備品担当として一流かも・・・？そのため、ワトソンはそんな細かいことに気を配る彼に「レーダー」という称賛を込めたあだ名をつけることに。そんなキャラクターの男なればこそ、ジュエルはその時代の上司の一人だったワトソンと親しい友人になれたわけだ。

それから約10年。ワトソンは中小企業局を辞め、今は弁護士事務所を開いていたが、そこに出版社から自叙伝の打診を受けているというジュエルから電話が。あの時の「レーダー」はアトランタ爆発事件で一躍英雄に！それは喜ばしいことだが、さて、自叙伝出版に向けてのアドバイスのポイントは？ワトソンがそんな検討を真面目に開始していたのかどうかは知らないが、数日後、一変して英雄から爆発事件の容疑者にされてしまったジュエルから、弁護士依頼の電話が！さあ、そんな事件の勝ち目はあるの？

ワトソンが最初にジュエルに対して「お前がやったのか？」と質問したのは実に適切。弁護士はこうでなくちゃ！「僕はやってない」とジュエルが答えたのは当然だが、その後いろいろとジュエルが自分に不利な事実を弁護士に話していないことがわかると、ワトソンはその度にジュエルに対して激怒していたから、この弁護スタイルも私と同じだ。そんな中で、少しずつ2人の信頼関係が生まれていったのは幸いだが、弁護士費用はどうなっているの？ジュエルは「出版社から入る金で支払う」と説明していたが、ワトソンは着手金ももらわないまま、そんな曖昧な契約(?)で受任するの？まあ、それは本筋ではないので、本作ではそれ以上触れられないが、成功報酬がいくらになったのかも含めて、私はそんな点に興味津々・・・。

■□■ 捜査権は誰に？FBI 捜査官の能力は？マスコミは？ ■□■

日本は特捜（検事）など一部の例外はあるが、犯罪の捜査権はすべて警察にあるうえ、その管轄や指揮命令系統はハッキリしている。しかし、アメリカ合衆国は、犯罪（捜査）が州を越えて広域にわたる場合、その捜査権が州警察にあるのか、それとも FBI や CIA 等にあるのか、が日本人にはわからないケースがある。クリント・イーストウッド監督の14作に上る「実話モノ」の1つである『J・エドガー』（11年）（『シネマ28』未掲載）は、捜査局を FBI と改称して権限強化し、その逝去まで48年間も長官の座にあったジョン・

エドガー・フーヴァーを描く超話題作だった。そして、同作に登場したフーヴァー長官はもとより、FBI 捜査官の面々は軒並み優秀だったが、本作で爆発事件を担当することになった FBI 捜査官トム・ショウ（ジョン・ハム）の能力は？

彼は事件当夜に、コンサート会場で自ら警備の任務に就いていたが、本作を観ている限り、あの警備ぶりでは、警備しているのか、コンサートを楽しんでいるのかすらよくわからないほど、いい加減なもの。ところが、自らの警備中にとんでもない爆発事件に出くわした彼は、その捜査権は FBI にあると主張。そして、かつてジュエルが警備員をしていたピードモント大学のクリアー学長からの通報で「ジュエルが怪しい」と聞くと、その当時のプロファイリングだけで、ジュエルを「孤独な爆弾犯」に仕立て上げたばかりか、彼をホントに“第一容疑者”だと思込込んでしまったようだから、私はその単純さにビックリ。これでは、FBI 捜査官としての能力はハッキリ言って失格！ それが、本作を観て私が大問題だと思った第1だ。

そして、第2に私が大問題だと思ったのは、明らかに色気で捜査情報を集めて来ているアトランタの大手新聞社アトランタ・ジャーナルの女性記者キャシー・スクラッグス（オリビア・ワイルド）の「ベッドでも OK！車の中でも OK！」という“お誘い”を受けたことによって、その耳で「第一容疑者として第一発見者のジュエルを考えている」と漏らしたことだ。その直後の一発！がキープできたのはラッキーだったかもしれないが、キャシーはその翌日に、他紙をすべて出し抜く号外トップで、実名入りの記事をぶち上げたから、トムはビックリ！日本でも、マスコミとりわけ週刊誌の取材のお行儀の悪さと、それに追従してしまう一部捜査陣の在り方が問題になっているが、1996年のアトランタ五輪の真っ最中に起きた爆発事件についての第一容疑者が、まさかそんな形で発表されるとは！

■□■マスコミが殺到！逮捕は？押収は？起訴は？■□■

世間を騒がせる犯罪が起きる度にマスコミは被害者宅や加害者宅に殺到し、少しでもコメントを取ろうとする姿が登場する。それ自体は必要な取材活動だが、そこでは『誰も守ってくれない』（08年）（『シネマ 22』258頁）が問題提起したような、「犯罪者家族の保護」はどうなっているの？同作は殺人犯として逮捕された少年の、中3の妹とその両親へのマスコミ攻勢がテーマだったが、本作では第一容疑者として大々的にマスコミ報道されたにもかかわらず、ジュエルは逮捕されていない、という現実をしっかりと押さえる必要がある。あの会場で起きた、釘を仕込んだパイプ爆弾による爆発事件は、組織的なテロ犯罪の疑いすらある重大事件。その第一容疑者なのに、FBI はなぜジュエルを逮捕しないの？それは逮捕の理由として必要な、「罪を犯したと疑うに足りる相当な理由」がないために違いない。しかし、こんな重大事件で逮捕もできないまま捜査（ジュエルの尋問）を続けて、FBI はジュエルを起訴できるの？他方、そんな状況下、ジュエルの弁護人に就任したワトソンは、

どんな弁護活動を展開すればいいの？

本作のパンフレットの「INTRODUCTION」には、「1996年、アトランタ爆破事件の“真実”を描く“衝撃”の問題作。」という見出しを掲げたとうえで、「不審なバックパックを発見した警備員リチャード・ジュエルの迅速な通報によって数多くの人命が救われた——。だが、爆弾の第一発見者であることでFBIから疑われ、第一容疑者として逮捕されてしまう。ジュエルの窮地に立ちあがった弁護士のワトソン・ブライアントは、この捜査に異を唱えるのだが・・・。」と書いている。こんな有名な事件で、しかもジュエルの名前をタイトルにしたクリント・イーストウッド作品の「INTRODUCTION」で、逮捕など一度もされていないジュエルを「第一容疑者として逮捕されてしまう」と誤記するのは一体ナニ！これは、損害賠償に値するのでは・・・？

また、本作のパンフレットには、今村核弁護士の「REVIEW」「冤罪の恐怖と弁護」があり、そこでは、「起訴されず、身柄も拘束されないまま延々と捜査が続いていく。結局は裁判になる前に、連邦捜査官の捜査対象から外れて終わりという状況」と、よく似たケースを担当したことを、例を挙げて解説している。そして、そんな場合はいつまでたっても捜査が終わらず、裁判も始まらないため、弁護活動が極めて難しいことを語っている。

本作では、ジュエルの逮捕を巡る論点が一向に登場しないのは不思議で、私に言わせれば、これはワトソン弁護士の一種の怠慢？それに代わって本作で描かれるのは、FBIによる家宅搜索と押収の姿だ。そこでFBIは、子供のものから母親の下着までありとあらゆるものを押収しようだが、それって一体何の意味があるの？

■■■見モノは母親の涙の会見？天然ボケにFBIが敗北？■■■

本作は1996年のアトランタ五輪で起きた爆発事件の犯人逮捕を巡る物語だから、「犯罪モノ」「捜査モノ」の問題提起作として、私の「法廷モノ名作」の一本に収めるべき。本作鑑賞前はそう思っていたが、本作のラストに向けての2つのクライマックス(?)を確認した後は、新聞紙上で「1996年に米アトランタで発生した爆発テロ事件の容疑者扱いされた警備員が、執拗な捜査や加熱する報道合戦に翻弄される姿を、実話に基づいて描いたサスペンスだ。」と解説されているとおり(だけ?)の映画だと気付かされた。そのため、私としてはクリント・イーストウッド監督作品としてはイマイチで不満が残る。

それはともかく、本作のクライマックスの1つは、新聞紙上で「もっとも涙を誘うのはキャシー・ベイツ演じるジュエルの母が、マスコミに向けて息子の無罪を切々と訴える場面であろう。」「息子の無実を訴える終盤のスピーチは、涙なくしては見られない。」と書かれている、母親の会見シーン。しかし、そこで私が納得できないのは、彼女が大統領に向けて「息子の無罪を晴らして下さい」と訴えること。アメリカは日本と同じく三権分立の国だから、容疑者にされている人間(の母親)が、行政のトップたる大統領に「無罪にしてくれ」と訴えてもナンセンスなことは明らかだ。第2のクライマックスは、FBI捜査官

トムからジュエルが呼び出され、弁護士同席で会見する場において、ジュエルが「あなたが私を爆発事件の犯人だとする根拠は何か？」と端的に質問したのに対し、トムが何も答えられなかったこと。こりゃ一体ナニ？そもそも、この場が「交渉の場」なのか、それとも「取調べの場」なのかはわからない。え、ジュエルを爆発事件の容疑者だとする証拠を何ら挙げられず、その根拠が「孤独な爆破犯のプロファイリングに合う」というだけでは、全然話しにならないのは当然だ。たしかに、よく考えてみれば、いくら家宅搜索をしてもジュエルの家にはパイプ爆弾を作った形跡はなく、バックパックをどこで購入したかの証拠も全くない。また、「記念公園に爆弾を置いた。あと30分で爆発する」という犯行予告電話をジュエルがかけたのか、それともジュエルの共犯者がいたのかについても、本作では何も提示されていない。要するに、本作でジュエルを容疑者と決めつけた根拠は、「ジュエルのオタク性」しかなかったわけだ。そんなバカな！FBIはそんな薄弱な根拠の下で、ジュエルを爆発事件の第一容疑者だと認定したの？それは、結果的にホンモノのテロ犯を見逃したことになるのでは？いやいや、そんなバカげた実態がわかったのは本作を鑑賞した成果だが、これではFBIのバカさ加減が浮き彫りになっただけ。そのため、母親の「涙の会見」も、半分白けてしまうことに・・・。

2020（令和2）年1月31日記